

今日のお題は中唐期の詩人、劉禹錫（772～842）の七言絶句です。劉禹錫は日本ではあまり知られていませんが、中国ではとても有名です。劉禹錫の名を聞けば、誰もがその作風をイメージ出来るほど人気があるそうです。

劉禹錫は、日本ではお馴染みの白居易（772～786）と同年です。また柳宗元（773～819）とは同期で793年に科挙に合格し進士となっています。白居易と同様、下級官僚階層の出身で、一説には匈奴の末裔とも伝えられています。科挙の合格は22歳（数え年）、白居易より7年早く宮仕えします。

当時は政治の中心が貴族からエリート官僚に移る過渡期でした。そのはざまに立ちはだかっていたのが宦官たちです。宦官は宮廷内の闇の集団として、権力をほしいままにしていました。したがって当時の官僚世界は、若くて有能な新進官僚にとって必ずしも居心地よいものではありませんでした。そのため彼らの間では革新の機運が一気に高まっていました。劉禹錫は科挙に合格した後、同期の柳宗元らと共に、革新派の王叔文を中心とした改革運動に加わりますが、あまりに改革を急いだため、運動は失敗に終わり、王叔文は死罪となり、劉禹錫も左遷されます。11年後に都に戻されたものの、その時書いた詩をまた政府批判の詩だと見なされ、再度左遷されるのです。白居易と出会うのは54歳の時、ようやく左遷が解かれて都に帰る途中のことでした。

同年で、何れも高名な人物であり、間接的には互いを知り尽くしていたものの、人生の後半期にようやくめぐり逢えたのでした。出逢った途端に二人は意気投合し、劉禹錫が世を去るまで交流を深めたそうです。同年で共に宮仕えをしたとはいえ、進士になった年代が白居易の方が遅く、また双方が政治批判のために時を異にして左遷されていたので、すれ違い続きだったのでしょう。メールも電話もない時代、出逢いの喜びは相当深いものだったに違いありません。生まれ年だけでなく、出身階層も、政治

批判で左遷されたことも同様なら、また共に音楽の才能に恵まれた詩人という点でも二人は共通していました。このように共通項が多々あった二人、「この二人が二度目に出会った時、互いに酒を酌み交わしながら、箸で皿を叩いて唱和したという喜びの詩を白居易は残しています。「素晴らしいですねえ。私もこういう友人が欲しいですね。」と植田先生。

お酒を飲みながら皿を叩いて共に唱和した様子を思い浮かべると、なんだか和気藹々とした楽しい雰囲気伝わってくるようです。

さて、連州（広東省）、朗州（湖南省）など、左遷を重ねて南方各地を転々としていた劉禹錫は、左遷先に伝わる各地の民謡に造詣を深めていきます。「竹枝詞」とはその民謡のスタイルの一つです。他に「楊柳枝詞」「踏歌」などがありますが、これらの民謡を、洗練された絶句スタイルに仕上げたことが劉禹錫の功績として知られています。この『竹枝詞二首其一』も、民謡調を完璧な七言絶句にアレンジしています。

zhú zhī cí èr shǒu qí qí
竹 枝 詞 二 首 其 其
liú yǔ xī
刘 禹 锡

yáng liǔ qīng qīng jiāng shuǐ píng
杨 柳 青 青 江 水 平
wén láng jiāng shàng chàng gē shēng
闻 郎 江 上 唱 歌 声
dōng biān rì chū xī biān yǔ
东 边 日 出 西 边 雨
dào shì wú qíng què yǒu qíng
道 是 无 情 却 有 情

ようりゅうせいせい こうすい
楊柳青青として江水平かなり
ろう こうじょう しょうか
郎の江上に唱歌するを聞く
とうへん ひい
東辺に日出でて西辺に雨
これ はれな い かえ しょう
是れ晴無きと道うも却って情あり

一句目。長江のほとりに青青とした枝垂れ柳が立ち並んでいます。春の長江は上流からの雪解け水を

満々と湛えてゆったりと流れています。「平」とは水かさが増して水面が岸边と平らかになった状態をいいます。

二句目。若い男が大河のほとりで歌う声が聞こえてきます。これは、当時の風習で、年に一度の祭りの日に男女が互いに歌い合って、歌の好みやセンスの合う結婚相手を探すという、今でいう集団見合いや合コンのようなものでした。若い男女の真剣な恋の歌合戦です。日本でも万葉時代に歌垣という風習があったそうですが、おそらくそれに似たものでしょう。

三句目は東に日が出ているのに、西側は雨が降り出した。お天気雨でしょうか。川辺に広がる雄大な景色が目には浮かびます。

四句目。晴れが無いというのに却って情がある。書き下し文で読むと何を言っているのかよく分かりませんが、中国語では「晴」と「情」は同じ音。「無晴」とはシャレ言葉で「無情」の意味です。「無晴(情)」と「有情(晴)」、つまり恋の相手は自分に気が有るのかなのか、さっぱりわからないという意味になります。三句目と四句目は恐らく男の子の歌う歌詞の引きうつしでしょう。

この風習は若者達にとっては伴侶選びの場であり、ある意味一生を左右する大事な行事です。あぶれたら大変です。本当にあの娘は自分に気があるのだろうか？ ハラハラする若い男子の心のうちが伝わるようです。

ここまで読むと、三句目の東は晴れで、西は雨という天気の詳細も、つかみどころのない女心の暗示とも思えてきます。

日本語でも「キラキライも好きのうち」なんて言いますが、不安定な恋の始まりは、みずみずしい若葉の季節とも重なり、読み手に明るく健康的な空気をもたらしてくれます。同時に作詩のスタイルも七言絶句の作法にぴったり合っています。一見俗っぽいようで、かつ上品という絶妙さも見事です。

訓読するとどうしても硬いイメージが抜けませんが、中国語で読んでみると非常に読みやすく、各句に散りばめられた鼻音韻尾のng音が耳に心地よいのが印象的です。

劉禹錫は白居易以上に、左遷先の人々の言葉や生活に馴染んでいたようです。二人が出会ってから、白居易も民謡調をモチーフにした作品を書いていることから、劉禹錫の影響を受けたことが考えられます。劉禹錫のことを「詩豪」と称賛していたことから、白居易が彼に一目置いていたのではないかと考えられます。

さて、白居易は日本で大変な人気でしたが、この劉禹錫という人物とその作品は日本ではあまり知られていません。このような現象はよくあることで、日本人と中国人の好みの違いもあるかと思いますが、また同時に、訓読と原語で読んだときの印象の違いも、この詩を音読してみるとよく分かります。やはり、漢詩が音の世界でもあることを改めて思い知らせてくれます。

この詩も最初、植田先生が訓読されましたが「書き下しの日本語で読むと、この詩のどこが良いんだ？と思うんですけどね。中国語で繰り返し読んでいくうちに、なるほどこれが民俗色豊かな漢詩の真骨頂なんだな、と思えてくるんですね」という前置きで、今回も中国語の読み練習が始まりました。

情景を思い描きつつ、その情景に音をのせていきますと、ふとその時代のその場所へタイムスリップしたかのような気になります。アラフォー女子も今度生まれ変わったら、大自然の中、春の川辺で歌を交わして、気の合う伴侶を探す、なんて、明るく健康的で、しかもドキドキするような経験をしてみたい！と思わずにいられませんでした。ほんに羨ましい。

*** ** ** ** **

二首目も劉禹錫の作品で「踏歌四首其一」という七言絶句です。「踏歌」も「竹枝詞」と同様、民謡スタイルの一種で、足を踏みならして拍子をとりながら歌うことからこの名がついたそうです。ちなみに李白の有名な七言絶句『贈王倫』(王倫に贈る)にもこの「踏歌」のことが出てきます。

「踏歌」を辞書で引きますと、「奈良から平安時代に行われた群舞形式の歌舞。中国から移入された芸能であるが、次第に日本化し、これより古くからあった歌垣とも合体して流行した」とあります。また宮中行事としても行われていたようです。唐の時代、

中国の各地で行われていた行事が、日本にも伝わっていたのです。そして本家の中国ではおそらく少数民族の一部を除いて、類似の慣習は消滅したと思われませんが、日本では今現在も大阪住吉神社、名古屋熱田神宮、熊本阿蘇神社などで、形を変えつつも神事の一つとして脈脈と受け継がれていると聞けば、感慨深いものがありますね。これもまた植田先生が常々仰っている「日本は中国文化の冷凍庫である」という事例の一つかと思えます。なお中国でも少数民族の間では、この風習は後世まで続いていたようです。今では南方のある地域で観光の目玉にもなっていると聞きます。

さてこの詩、一句目は「春江」とありますが、春になると、長江は上流の雪解け水で増水します。「月出でて」というのは、春の満月の晩に満々と水を湛えた川辺で集団見合いをやっている情景なのですが、二句目の「堤上の女郎」とは、堤の上を女の子達が集まって歩いていく様子を表しています。ここでの女郎とは、普通の若い娘さんのことです。

なんだか春の息吹きと共に若い男女のざわめきが聞こえてきそうな一、二句目です。ところが、続く第三句目は、この日のために用意した苦心の作をすべて歌い尽くしても、「歓見れず」と、一人の女性の胸の内を描いています。「歓」とは、ここでは意中の人、彼氏を指します。男女が歌を交わしながら、気の合う人を見つけなければならぬこの行事で、周りの女の子が次々と相手を見つけ、二人で何処かに消えていくなか、夜通し歌い尽くしても、相手が現れないのは何とも寂しいことですね。

第四句目の「紅霞樹に映じて鷓鴣鳴けり」とは、朝焼けに映えて木々や草木の姿が見え始める頃になって、シャコの寂しく鳴く声が聞こえるというのです。シャコはキジ科の鳥で、鳴き声は鶏に似ていますが、どことなく物悲し気な響きがあります。このシャコは李白の七言絶句『越中懐古』にも出てきますが、「シャコが鳴く」という表現自体が寂しさを連想させるものです。劉禹錫はこの表現を借りて、意中の彼と出会えなかった女性の心の内を見事に写し出しています。若い女性が恋人を求めて朝まで歌い続けるというのは、漢民族の風習としては考えにく

いことですが、この時代の南方諸地域は漢民族の儒教文化がまだ浸透していませんでした。このような素朴でエキゾチックな風習が、かえって作者の心を強く刺激したようです。

ただこの第四句目の「紅霞」は夕焼けともとれませんが、この歌会の行事は、月が出た頃から始まっているということでもあるので、この場合の「紅霞」は朝焼けを指し、シャコの声が早朝の森に寂しくこだましているということかと思われまます。劉禹錫のこの他の作品にも、夜通し男女が歌い交わす行事を題材にしたものがあるとのことですから、この詩に詠われた行事もそうだった可能性が高いですね。

何れにしても、歌声と作詞のセンスから相手を判断するというのは、現代においても新鮮ではないかと思いました。アラフォー女子の独断と偏見ですが、異性の歌声もさることながら、言葉に対するセンスの一致もかなり重要じゃないかなあ、なんて思います。

さて、この詩に詠まれた女性、次の機会には素敵な伴侶に巡り会えたでしょうか。そうあって欲しいと願わずにはられません。千年以上も前に生きた、名もない女性たちの気持ちが、一篇の詩を通して時代と国境を越えて、今を生きる私達と瞬時に繋がる… これも漢詩の尽きない魅力の一つなのです。

tà	gē	sì	shǒu	qí	yī	
踏	歌	四	首	其	一	
	liú	yǔ	xī			
	刘	禹	锡			
chūn	jiāng	yuè	chū	dà	dī	píng
春	江	月	出	大	堤	平
dī	shàng	nǚ	láng	lián	mèi	xíng
堤	上	女	郎	连	袂	行
chàng	jìn	xīn	cí	huān	bú	jiàn
唱	尽	新	词	欢	不	见
hóng	xiá	yǐng	shù	zhè	gū	míng
红	霞	映	树	鷓	鴣	鸣

しゅんこうつき い てい
春江月出でて堤平らかなり
ていじょう じょうろつたもと
堤上の女郎袂を連ねて行く
きみあらわ
新詞を歌い尽くすも歓見れず
こうか き しやこ
紅霞樹に映じて鷓鴣鳴けり

この詩もやはり ng 韻尾が美しく響きますね。